

生態学的な建築学(生態建築学)の措定

関連するSDGsの国際目標

14

海の豊かさを
守ろう

12

つくる責任
つかう責任

環境科学部 環境建築デザイン学科 准教授 西澤 俊理

研究分野：生態建築学(Ecological Architecture)

文化という自然から分離された枠組を想定し、その内側で人間どうしの連帯を追究してきた従来の建築学からの転回を目指します。人間と生き物、さらには人間のうちの動物性(身体)と人間性(精神)という、本来は不可分でもある別々の存在どうしを認め、その「開かれ」のうちに幸せな仕方で両者を連帯する「生態学的な建築のあり方」を研究します。

■生態建築学の理論の研究

私たちの身近に遍在する環境と身体との応答の仕組みを観察する一方で、エコロジーの始祖ユクスキュルやその影響を受けた哲学者たち、また人類学のスケールで建築を俯瞰する原広司や塚本由晴のような偉大な先駆者たちの言説を参照しながら、「空間」の概念を「人どうしが共感する領域」から「人と生き物が共感する領域」へと転回するための基礎的理論を構築する。

■生態建築学の分析論理の研究

人間にとって、生き物は資源利用の対象であると同時に、愛情や感情移入の対象でもあり、そのような関係が生じている場所では何らかの「空間」が発生している。ここでは特に琵琶湖集水域をフィールドとし、水、光、音、動植物と人間とが共に作り出す様々な現象における個別の「空間」を実測・分析し、生態建築学の「見かた」を検証する。また、それらを重ね合わせた先に析出する「空間の琵琶湖性」について考察する。(図1, 図2, 写真1, 写真2)

■生態建築学の設計論理の研究

人間の「具体的な身体」と「抽象的な精神」の双方が、敷地や生き物といった存在者と応答するための道具として、建築は「存在と世界」に関わっており、「世界における存在の居場所」として「空間」を創出することができる。メコン河流域の高床住居などの設計案件を通して、生態系との新たな関係を構築する生態建築学の「創り方」を検証する。(図3, 写真3, 写真4)

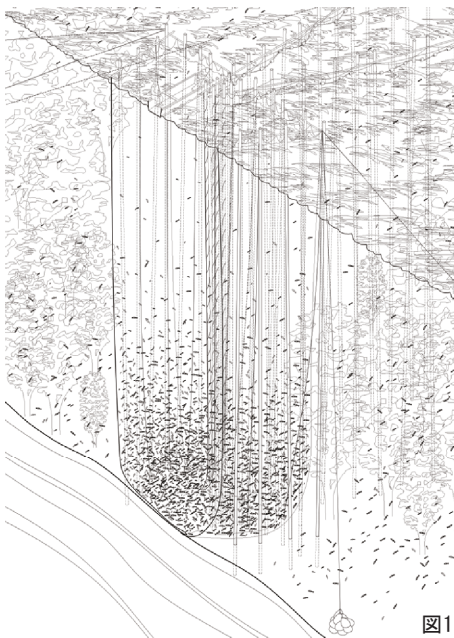


図1

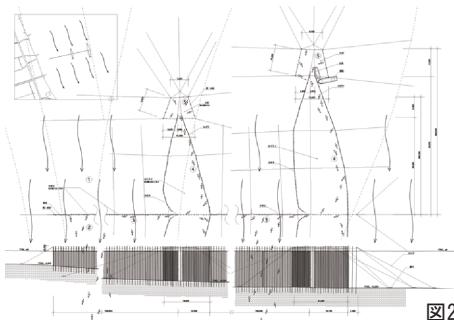


図2

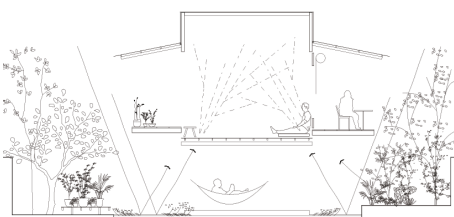


図3

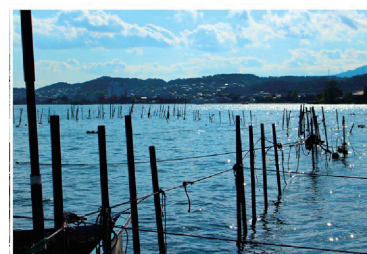


写真1



写真2



写真3

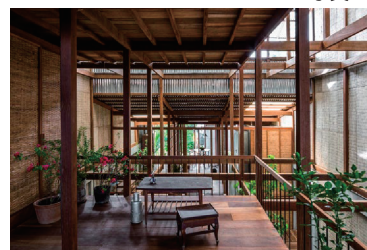


写真4

図1, 図2, 写真1：琵琶湖 鮎漁の実測
写真2：琵琶湖 ゆりかご水田の実測
写真3：カンボジアでの高床住居調査
図3, 写真4：ベトナム・メコン河流域での高床住居の設計事例